

志向的経験としての行為

フッサールの観点から

植村玄輝

行為論の入門書を開けばほとんどかならずと書いていいほど最初の方に書いてあるように、行為は単なる身体運動以上の何かである。たとえば、入国審査で自分の順番が来て前に歩み出るとは、いきなり背中を押されて前によろけることとは異なる。そして、行為論の入門書にほとんどかならずと書いていいほど書いてあるかはわからないが、行為と単なる身体運動のこうした区別は、私たちの経験の水準で成り立つ事柄でもあるように思われる（この区別が経験の水準でしか成り立たないといいたいわけではない）。前に歩み出ることと前によろけることの違いは、岡山駅東口の桃太郎像を見ることと岡山駅東口の桃太郎像について考えることの違いと同様に、特別な事情がないならば、私たちのそれぞれがまさにそれを行なっている現場で一人称的観点から気づくことができるものだからだ¹。その限りで、進行中の行為は経験としての側面を備えており、経験の観点からの哲学としての現象学によって扱うことができしかなるべき事柄である。また、それが哲学・倫理学全般にとってどれほど重要かを考えれば、行為は、大胆不敵にも「哲学入門」と銘打った書籍が無視するわけにはいけないトピックだとさえいえるかもしれない。にもかかわらず、私が編著者の一人として関わった『ワードマップ現代現象学——経験からはじめる哲学入門』には、行為を論じる独立した章や項目がない²。そのため、「行為について、現代現象学的な観点から、つまり、それを経験するとはどのようなことかに着目しながら論じることがどうやってできるのか」という大切な疑問に、同書ははっきりとした答えを与えていない。この不足を本稿で多少なりとも補いたい。以下で私は、より発展的な内容を扱う『ワードマップ現代現象学』の続編を書いているかのような気分になって³、行為論への現象学的なアプローチのひとつを素描する。また、ごく簡単にではあるが、そこでの議論をいわゆる

分析哲学の伝統のなかで現象学とは独立に発展してきた行為論の近年の展開と関係づけることによって、それがどのような意味で現代現象学的な試みでありうるのかについてもいくらかの見通しを与える。

本稿の構成は以下の通りである。まず、本稿の主題となる進行中の行為とは何かを簡単に説明し、私が擁護するフッサールの見解を導入する（第1節）。次に、フッサールの見解が進行中の行為に関するサールの立場に類似していることから想定される、ドレイファスの立場からの反論を取り上げ（第2節）、それに対処する（第3節）。さらに、そこまでの議論を踏まえて、フッサールの見解に積極的な根拠を与える（第4節）。最後に、行為論の近年の展開との関連なども踏まえつつ、行為の哲学への現象学的なアプローチの意義や、そもそも哲学への現象学的なアプローチとは何なのかについて、いくつかの所見を述べる（第5節）。

1. 進行中の行為に関するフッサールの見解

本稿の主題は、進行中の行為、つまり「(Sは) ϕ をしている／していた／しているだろう」という進行相（進行アスペクト）の動詞によって表現できる行為である⁴。進行中の行為には、完了相の動詞で表現できる行為、つまり「出来上がったもの」としての行為が対置される。たとえば、私が1階の入り口から4階の（自分の）研究室に移動しているまさにその最中に私がしている行為は、「私は研究室に行っている」と表現することができる進行中の行為である⁵。それに対して、「私は今週の平日には毎日研究室に行った」と語るとき、私が語っているのは、研究室に行ったという、完了した行為である。

現象学的観点からの行為の哲学にとって、進行中の行為は避けて通ることのできない事柄である。たしかに行為は第三者によって（典型的には道徳的に）評価することができ、その意味では、三人称的なアクセスが可能なものである。しかし、行為は私たちが自分の行為として行うことでもあり、まさにこの点こそが行為を他の出来事から区別するといっているはずだ。そして、冒頭で触れたように、私たちがすることとしての行為には、その行為の主体としての私たちが独自の観点から気づいている側面、つまり経験としての側面があるように

思われる。これらの点に鑑みるならば、「行為の経験」というそれ自体としてはいささか曖昧な表現にもっともふさわしいのは、私がまさに行為をしているという経験であって、他人や自分のした（あるいは、他人や自分が未来や仮想的な状況においてするかもしれない）出来上がったものとしての行為について考えたり評価したりする経験ではないだろう⁶。以下では「(進行中の) 行為の経験」を、私が行為をしているという経験を指すための言葉としてのみ用いる。

さて、本稿で私が擁護したいのは、行為の経験に関するフッサールの見解であり、それは、以下のような一連の主張としてひとまず定式化できる（RA は Representation in Actions, P は Phenomenological の略）。

(RA) 進行中の行為は表象的な志向性を持つ。

(RA-P) (RA) やその帰結は、進行中の行為に関する現象学的分析として正しい。

この見解はいくつかの点でフッサールの見解である。この見解が、少なくともそれによく似た見解を、フッサールはある研究草稿のなかで表明している⁷。そしてこの見解は、フッサールの公刊著作からも適切な解釈作業を通じて取り出すことがおそらくできる⁸。さらに、本稿の第4節でフッサールの見解をサポートするために行われる議論のいくつかは、フッサールに依拠したものである。だが、『ワードマップ現代現象学』のやり方を踏襲する本稿では、この見解をフッサールに帰属させることができるのかという問題には立ち入らない。ここで私の目的は、あくまでも、フッサールに着想を得た自分自身の見解を提案し擁護することである。現代現象学と（狭義での）フッサール研究の関係については本稿末尾の第5節でも論じることになる。

以上を踏まえてフッサールの見解がどのような主張なのかを明らかにすることから議論を始めよう。(RA-P) は (RA) を含むのだから、まずは (RA) に含まれる用語の意味をはっきりさせるのが筋だろう。

志向性とは「何かについてのものであること」や「何かに向かっていくこと」という言い方によって表現できるような特徴のことである。志向性は、すべてではないかもしれないが、多くの経験が共有する特徴である。私たちは何かに

ついて考えることなしに意識的な思考をすることはできないし、何かを欲することなしに欲求を覚えることはできない。しかもこれらのことは、私たちに何らかの能力が不足しているためにできないのではなく、思考や欲求の本性からして不可能なことであるように思われる。

表象的な志向性とは、特定の内容を持つことと同一視されるような志向性のことである⁹。岡山の夏は暑いと考える経験が岡山についての経験であることは、それが〈岡山の夏は暑い〉という内容を持ち、この内容に岡山が登場することと同一視できる¹⁰。岡山の夏が暑いことを欲する経験が岡山についての経験であることについても事情は同様である。すると、一般化して、思考や欲求は表象的な志向性を持つ経験だということができるだろう。ここで重要なのは、経験が持つ内容は、その経験の充足条件、つまりその経験が正しい／成功した／実現したものになるための必要十分条件によって個別化されるという点である。岡山の夏は暑いと考える経験が正しいのは、岡山の夏が暑いときであり、そのときに限られる。岡山の夏が暑いことを欲する経験が実現するのは、岡山の夏が暑いときであり、そのときに限られる¹¹。このように2つの経験の充足条件は同一であるため、それらは別種の経験であるが、同一の内容を共有する。以下ではこうした内容を「表象内容」とも呼ぶ。

(RA)によれば、進行中の行為は充足条件によって個別化される表象内容を持つ。この内容とは具体的にはどのようなものだろうか。研究室に行っているという行為を例にして考えよう。私がいままさにしているこの行為が成功する(つまり、完全に実現する)のは、私が研究室にいるという条件が満たされたときに限られる。しかし、これだけではこの行為が成功する必要十分条件を特定したことにはならない。私が3階に差し掛かったあたりで誰かに後頭部を殴打されて気絶し、目覚めたら自分の研究室の床の上に横たわっていたとしよう。このとき、私が研究室にいるという条件は確かに満たされたが、だからといって私は研究室に行っているという自分の行為を完了させたわけではない。なぜなら、私が研究室にいるという状態を成り立たせたのは、(たぶん)私を襲った何者かであり、研究室に行っていた私ではないからだ。したがって、研究室に行っているという進行中の行為の充足条件には、(1)私が研究室にいるという状態が成り立つことだけでなく、(2)この状態がまさにその進行中の行為によ

って成り立たせられるということが含まれなければならない¹²。

このように、進行中の行為はその充足条件に因果的な自己言及性（その行為が特定の身体的状態を成り立たせること）を含む¹³。これが意味するのは、進行中の行為は、充足条件の一部をなす行為者の身体の状態を成り立たせるような働きを持つということである。研究室に行っているという行為は、私が研究室にいるという状態の成立に向けて、私の身体に特定の身体運動を引き起こすのである。

(RA) が進行中の行為に割り当てる充足条件は、何かをしようとする意志の充足条件と同じ構造を持つ。研究室に行こうという私の意志が実現されるのは、(1') 研究室にいるという状態が成り立ち、かつ、(2') この状態がまさにその意志によって成り立たせられるときであり、そのときに限られる。意志の充足条件に(1') だけではなく(2') も含める必要がある理由はもう明らかだろう。私が研究室に行こうという意志を形成した直後に誰かに後頭部を殴打されて気絶し、目覚めたら自分の研究室の床の上に横たわっていたとしても、そのことをもって私の意志が実現されたとみなすことはできないからだ。

(RA) から帰結する進行中の行為と意志の類比は、これにとどまらない。進行中の行為（のトークン）は、その主体がそれを完了したものとみなす瞬間に消えて無くなる（あるいは、過去に進行中だった、もはや進行中ではない行為になる）。私が10時ちょうどに研究室に到着し、そのことに気づいていたならば、10時以降には私はもはや研究室に行っていない¹⁴。同様に、意志（のトークン）も、その主体がそれを完全に実現されたとみなした時点で消えて無くなる。研究室についたらまずエアコンのスイッチを入れようという意志を、私が事前に持っていたとしよう。そして私は、研究室に到着してすぐに、その意志に基づいてコントロールパネルをいじることでエアコンのスイッチを実際に入れ、暖かい風を感じたとしよう。このとき私は、エアコンのスイッチを入れようという意志をそれ以降にはもはや持たない。このように、進行中の行為と意志は、その主体がその充足条件を満たされたものとみなすことによって消失するという点でも、共通の特徴を備えているのである。

以上からわかることだが、(RA) によれば、私がある進行中の行為をある時点で開始したことは、私が行為に先立って何らかの意志を形成したこと、つま

り決意したことと類比的な関係にある。そのかぎりでは、(RA)は、どんな進行中の行為の始点にも「決意の類比物」があることを認めている。この類比物を、フッサールにならって「fiat (かくあれ)」と呼ぼう¹⁵。こうして指定された fiat は、それを始点とする進行中の行為が完了することによって実現する。それはちょうど、私の決意がそれによって形成された意志の実現によって実現されるのと同じである。

さて、(RA)は、進行中の行為に対してその外側（つまり第三者の立場）から内容を帰属させるものとして理解する限り、妥当な主張であるか、少なくともそれに近似したものだといえるだろう。進行中の行為は、成功することも失敗に終わることもありうる。私は1階の入り口から4階の研究室にたどり着くこともあれば、2階に上がるまでの階段の踊り場で鍵を忘れたことに気づいてすぐに帰宅し、そのまま面倒になって家で仕事をすることもあるだろう。そして、研究室に行っているという進行中の私の行為が成功する条件は、(1)私が研究室にいるという状態が成り立つ、(2)この状態がまさにその進行中の行為によって成り立たせられるという2つの条件の連言によって（少なくとも近似的に）捉えられている。また、そこで（ある程度）明らかにされた進行中の行為の充足条件が意志の充足条件と類似している以上、進行中の行為に自己言及的な因果を認めることや、そうした行為の始点に fiat を指定することも、それが進行中の行為を第三者の立場から分析したものとみなされるかぎりでは、とりたてて問題にはならないはずである。それはちょうど、防犯センサーが異状を「察知して」侵入者に対して「警告をした」という言い方が、防犯センサーの働きを外側から述べたものとみなされるかぎり（つまり、防犯センサーの観点なるものからその挙動について記述するとういう言い方になると主張しないかぎり）、とりたてて問題にならないことと同じだ。

しかし、(RA-P)については、進行中の行為を第三者の立場から分析するものだといって話を済ませるわけにはいかない。(RA-P)によれば、(RA)は、進行中の行為の経験に関する正しい現象学的分析を提供する。つまり、進行中の行為が充足条件によって特定される表象内容を持つことや、それが充足条件を満たすために特定の身体状態を引き起こすことや、その始点に fiat が位置づけられることは、当該の進行中の行為をまさに行なっている行為者が独自の観

点から気づいていることを何らかのしかたで捉えているというのである。したがって、(RA-P)を認めることは、進行中の行為の経験に関する次の2つの現象学的な主張を認めることでもある。

(fiat) 進行中の行為の経験の始点には決意の類比物としての fiat が含まれている。

(causing) 進行中の行為がそれによって実現されるべき状態を引き起こすことは、その行為の経験に登場する¹⁶。

(RA) がどれほどもっともであろうとも、それによって (fiat) と (causing) の正しさが保証されるわけではない。それはちょうど、防犯センターのはたらきを外側から「察知」や「警告」という言葉を使って描写することがもっともであろうとも、それによって防犯センサーが自身の察知や警告に独自の観点から気づいているということが保証されるわけではないのと同じである。

したがって、フッサールの見解の擁護者は、(RA) の内実を明らかにするここまでの議論とは別立てで、(RA-P) を説得的にするための議論（つまり、(fiat) と (causing) を説得的にするための議論）を提出しなければならない。だが、そうした擁護の試みがすぐに直面することが予想される問題がある。進行中の行為に関するフッサールの見解に対して、サールの行為論に対するドレイファスの批判を大枠ではほとんどそのままし向けることができるのである。節を改めて、この批判がどのようなものかを明らかにしよう。

2. フッサールの見解へのドレイファスの批判

ドレイファスのサール批判がフッサールの見解にも適用可能だということは、ドレイファスの仕事を多少なりとも追ったことがある人や、サールとフッサールの両方に慣れ親しんだ人には、ほとんど意外性のないことだろう。ドレイファスや他の論者が論じてきたように、志向性に関するフッサールとサールの見解には似たところがある。ドレイファスによれば (cf. Dreyfus 1982, 4-5)、サールの言語行為論がフッサールの志向性理論と類似していることは、サールが志

向性に関する最初のもつた論考 (Searle 1979) を発表するよりもまえに、モハンティによって指摘されている (cf. Mohanty 1977, 36). ドレイファス自身も、サールの 1979 年の論考に基づき、志向性全般に関する両者の見解の近さを論じている (cf. Dreyfus 1982, 5-6). また、(ドレイファスと同じくフェレスダールの学生だった) マッキンタイアも、サールの『志向性』(Searle 1983) の書評で同様の指摘を行なっている (cf. McIntyre 1984, 471-473). そして 1990 年代に入ると、両者をまとめて「HusSearle」と呼ぶという、誰もが思いつきそうだけれども多くの人には実際に書くのを思いとどまるはずのジョークを論文の表題に紛れ込ませるバイヤーのような人まで登場する (cf. Beyer 1997). こうした両者の類似性を背景に、ドレイファスは、ハイデガー (やメルロ=ポンティ) のフッサール批判を、サールに対する批判へと仕立て直すのである¹⁷.

行為が問題になる場合にも、こうした構図は変わらない。実際、前節で導入したフッサールの見解のうち、少なくとも (RA) は、行為の志向性に関するサールの見解 (Searle 1983, ch. 3) と類似している¹⁸. 両者はともに、進行中の行為が表象的な志向性を持つことを認め、その充足条件に因果的な自己言及性を認める。もちろん両者には相違があり、それらのいくつかは、それはそれで重要なものである¹⁹. しかしドレイファスの批判がターゲットとするのは、両者に共通する一般的な見解だ (あるいは少なくとも、ドレイファスの批判をそのように解釈できる). すぐあとで見るように、ドレイファスによれば、進行中の行為は表象的志向性を持ち、その充足条件には因果的な自己言及性が含まれるというサールの見解は、熟達した行為に関するハイデガーやメルロ=ポンティの議論に照らし合わせると、現象学的に疑わしいというのである。

ドレイファスのこうした批判は、サールの立場が進行中の行為の経験のあり方の分析を目指したものであることを前提している。そしてサール自身はといえば、ドレイファスへのある応答のなかで、この前提を拒否している。自分の立場は行為の論理分析であり、行為の充足条件に関する自分の議論は行為の現象学に対して何事も帰結しないというのである (cf. Searle 2001, 277-278). この応答が適切かどうかについては議論の余地がある。というのも、サールはかつて『志向性』で、行為内の意図の充足条件に関する自身の立場について、「行為することの経験 (the experience of acting)」に関する議論も織り交ぜながら論

じていたのだが (cf. Searle 1983, 87–91), 件の応答ではその点に触れていないからである²⁰。だが, 目下の文脈でこうした問題に立ち入る必要はない。サールの立場がどのようなものであれ, 私が本稿で擁護したいフッサールの見解は, 進行中の行為が表象的な志向性と自己言及的な因果を備えることを, 現象学的分析の成果として明示的に保持しているからである。フッサールの見解の擁護者には, サールと同じやり方でドレイファスの批判をやり過ごすという選択肢はない。

さて, ドレイファスのサール批判の内実に入りよう。ここでのドレイファスの要点は, どちらかといえば単純なものだ。要するに, 私たちの熟達した行為ないし没頭した行為 (たとえば一流のアスリートの試合中の身のこなしや, あるいは私たちがルーティンとして行なっている日常的な動作。以下では簡便のため, これらを総称して「熟達した行為」と呼ぶ) のことを考えるならば, サールが進行中の行為について述べていることが経験の水準で成り立っているようには思われたいというものである。だが, こうした見解の根拠としてドレイファスがサール批判の文脈で熟達した行為に関して述べていることは, 箇所によってだいぶばらつきがある。主張としての強さの順番で並べるならば, ドレイファスの言い分は次のように整理できる。

- (a) 熟達した行為が進行している最中に, 私たちはその行為に特有の経験をまったく持たないことがある (cf. Dreyfus 2013, 38n43)。
- (b) 熟達した行為が進行している最中に私たちは自分が自分の身体運動を引き起こすのを経験していないし, そもそもそうした行為の経験は表象内容を伴わない (cf. Dreyfus 1993)。
- (c) 熟達した行為が進行している最中の経験は表象内容を伴わない (cf. Dreyfus 2001, 183–184; 2013, 31)。
- (d) 熟達した行為が進行している最中に, 私たちは自分の行為の経験が自分の身体運動を引き起こすのを経験していない (cf. Dreyfus 1991, 58; 1999, 4–6; 2000, 293–294)。

これらの主張のうち, 少なくとも (a) と (b) と (c) は, サールの立場だけで

なくフッサールの見解に対する批判にもなっていることが簡単にわかる。まず (a) は、熟達した行為にはそれに固有の経験が伴わないことがあるという主張である。この主張は、進行中の行為の経験のどれにも当てはまる分析を標榜するフッサールの見解への反例を出していることになる。次に、進行中の行為の経験には表象内容を伴わないものがあると主張する (c) も、そうした経験が表象内容を持つことを一般的に主張するフッサールの見解と衝突する。(c) と同じことを二番目の連言肢で述べている (b) についても事情は同様である。だが、(b) の最初の連言肢と同様のことを述べる (d) については、事情はやや込み入っている。フッサールの見解に含まれる因果的自己言及性に関する見解は、サールのそれとは異なるからだ²¹。だが、ドレイファスが (d) のように定式化できる主張がある箇所を擁護する際に次のように述べていることを踏まえるならば、この主張は、フッサールの見解に対しても反例を突きつけるものとして再解釈できる。

[サールも属している] 伝統とは対照的に、ハイデガーが示したいのは、私たちはふつう、自分の進行中の日常的な活動 (ongoing everyday activity) について主題的に気づいているわけではないということ、そして、主題的な自己言及的意識が生じるときには、それは非主題的で非自己言及的な気づきの様態を前提しているということである。(Dreyfus 1991, 58)

ここでのドレイファスによれば、私たちはふだん、習熟した行為に及んでいるとき、「その行為は (あるいは、その行為を行う私は) かくかくしかじかである」という形式の意識を持つわけではなく、それゆえ、因果的な自己言及性は進行中の熟達した行為の経験には含まれないというのである。ドレイファスの議論をこのように理解するならば、(d) は次のように書き換えることができる。

(d') 熟達した行為が進行している最中に、私たちは自分の行為の経験が何かを引き起こすのを経験していない

そしてこのより一般的な主張 (d') はフッサールの見解と衝突する²²。

3. ドレイファスの批判への対処

ドレイファス的な批判にフッサールの見解を擁護する立場から応答するにあたって、まず指摘しなければならないのは、熟達した行為にはその行為の経験が伴わない場合があると主張する (a) はとうてい信じがたいということだ。もしドレイファスが本当にこうした主張をしているのだとすれば、その根拠が熟達した行為の現象学にあると述べるのがどうしてできるのかわからなくなる (cf. Zahavi 2013, 321–322)。したがって、ここでドレイファスが述べていることを額面通りに受け取るべきではないだろう。むしろ (a) は、以下のように言い換えることがより適切であるような主張として理解するのがよいだろう。

(a') 熟達した行為に特有の経験は捉えがたい。

このより穏当な主張にはもっともなところがある。たとえば視覚的な経験のなかに特定の色が特定のかたちで配置されて登場するということや、怒りや悲しみのような情動的経験がそれぞれに特有の感じを伴うということと比べると、進行中の行為の経験のなかに何が登場するのかということは、それが熟達した行為である場合にはとりわけ明らかではない。というのも、熟達した行為、たとえば着慣れたシャツのボタンをとめることは、私たちがそれにほとんど注意を払わなくても行うことができ、多くの場合にそのような仕方で行っている事柄だからである。

この穏当な主張 (a') は、上の (b) と (c) と (d') のそれぞれと関連づけることができる。熟達した行為の経験は捉えがたいため、この経験は、「その行為はしかじかの状況が未来に成り立つことを表象する」や「その行為は何かを因果的に引き起こす」といった表現で記述できるようなはっきりとした特徴を持たない。すると、熟達した行為が進展しているあいだの経験には、これらの表現によって示すもの——充足条件によって特定される表象内容および因果的な自己言及性——の両方ないし片方が登場しないということを、結論として引き出すことができるようにみえる。

こうした解釈によってドレイファスの立場はある程度統一的なものになるが、ここには、議論の余地がある前提があるように思われる。それは、

ある経験がその捉えがたさゆえに「X」と記述できないならば、「X」によって表示されるものはその経験には登場しない

という前提である。この前提が少なくとも無条件に全面的に成り立たないことは、たとえば、12色（赤・ピンク・サーモンピンク・オレンジ・黄・薄緑・深緑・水色・青・紺・茶・黒）の色鉛筆のケースを開けて中身が揃っていることをさっと確認するとき私が持つであろう知覚的経験のことを考えてみればよい。この経験のなかには、私が名前を知っている12色の鉛筆が、特定の空間的な配置をともなって登場する。しかし、このとき私は、自分の経験を「黄色の鉛筆と緑色の鉛筆のあいだに薄緑の鉛筆があるのを見る」と記述できないかもしれない（ほんの少しのあいだ見ただけだから）。しかしそのことをもって、私のこの経験のなかには薄緑の鉛筆が黄色の鉛筆と緑色の鉛筆のあいだにあるという環境内の状況が登場していなかったということが保証されるわけではない（むしろ、私の経験のなかにはそうした状況が登場しており、たんに私がそれに十分に気づけなかつただけだろう）。

このように、上の前提が無条件には認められないとすると、進行中の行為の経験は捉えがたいという主張（a'）にもとづいて（b）と（c）と（d'）のいずれかを主張するものとして解釈されたドレイファスの議論は説得的なものではない。

上の前提を使わずに（a'）から引き出すことができるのは、せいぜいのところ、進行中の行為に表象的な志向性や自己言及的な因果という特徴が備わっていることをただちに認めることはできない、という主張だろう。この主張はもともとだが、それがフッサールの見解への批判として有効に機能するのは、フッサールの見解に何の積極的な根拠も与えられていないときか、あるいは、この見解に与えられた積極的な根拠に説得力がないときに限られる。次節では、(RA-P)に対して進行中の行為の経験に根ざした根拠を与える。これによって、ドレイファスのような立場からの疑念はとりあえず払拭されるか、あるいは少

なくとも、議論のターンをフッサールの見解の批判者に渡すことができるはずだ。

4. フッサールの見解の積極的な根拠

まずは議論の大きな概略を示しておこう。以下ではまず、フッサールの見解を構成する主張のうち、

(fiat) 進行中の行為の経験の始点には決意の類比物としての fiat が含まれている。

が進行中の経験をうまく捉えていることを示す2つの議論を提出する²³。次に、こうして根拠を与えられた (fiat) を手掛かりに、

(causing) 進行中の行為がそれによって実現されるべき状態を引き起こすことは、その行為の経験に登場する。

を擁護する。また、あらかじめ注意しておけば、(fiat) と (causing) を守るための以下の議論はどれも、最良の説明への推論というかたちをとるものでしかない。もちろん私は自分が提案する説明が単に良いものであるだけでなく、現時点では最良のものでもあると信じている。だがこのことは、私の視野の狭さに起因するだけかもしれない。そのため、これらの議論はそれほど強力なものではなく、説明されるべき事柄に関するより良い説明があとになって登場するならば、説得力を大きく失うことになるだろう。

4.1 (fiat) を擁護する第一の議論

(fiat) を擁護する第一の議論は、決意の経験と進行中の行為の経験のそれぞれが判断や信念の正当化において果たす役割に着目することで、両者のあいだに類比を認めることを正当化するものである。

決意の経験は、決意の内容が未来に実現されるという判断ないし信念に一定

の理由を与える²⁴。たとえば、研究室に行こうという私の決意の経験は、私にとって、私は研究室にいるだろうという信念の理由になる。別の言い方をすれば、「君はなぜ自分が未来に自分の研究室にいると思うのか」と聞かれたとき、私は「そう決めたからだ」と答えることができるのである²⁵。

これと同様に、進行中の行為の経験も、それによって未来に実現されることに関する判断ないし信念に一定の理由を与える²⁶。たとえば、私が研究室に行っているあいだ、その行為の経験は、私は研究室にいるだろうという判断や信念に理由を与える。別の言い方をすれば、(現実にはあまりありそうにないが)3階に差し掛かったところで私が誰かに「君はなぜ自分が近い未来に自分の研究室にいると思うのか」と聞かれたとき、私は(自分の経験にもとづいて)「いま研究室に行っているからだ」と答えることができるのである。

決意の経験と進行中の行為の経験のこうした類似性は、進行中の行為の経験の始点に決意の類比物があるということによって、つまり (fiat) によって説明できる。この提案にしたがえば、ある行為を開始しそれに携わり続ける経験は、それ以前にその行為に対応する決意をしたかどうかとは無関係に、行為者を未来に関する特定のコミットメントのなかに置くのである。ここで注目しておきたいのは、進行中の行為の経験だけでなく、それを始めるという経験もまた、未来に関する特定の信念の理由を与えるということである。3階に差し掛かったところで私が誰かに「君はなぜ自分が近い未来に自分の研究室にいると思うのか」と聞かれたとき、私は「私は研究室に行き始めたからだ」と答えることもできるのである。つまり、進行中の行為がたとえ中断されている状況でも(たとえば、私が階段の途中でたちどまってメールを読んでいるという状況でも)、私がその行為を始めたことの経験は、当該の信念ないし判断の理由を私に授けてくれるのである²⁷。

4.2 (fiat) を擁護する第二の議論

(fiat) を擁護する第二の議論に移ろう。この議論は、なめらかに滞りなくなされる進行中の行為とたどたどしくなされる進行中の行為の経験のあいだにないつつ対比に着目し、それらの相違を fiat によって説明するものである²⁸。

熟達した行為をしているとき、私は自分の行為を切れ目のないひとつのもの

として経験することがある。たとえば、着慣れたシャツのボタンを留めるという行為を考えよう。このとき典型的には、私の自分の行為を、数々の身体運動（第一ボタンを右手の親指と人差し指でつまみ、左手で対応するボタンホールを押さえ……）が連なることで成り立つ複雑なものとして経験しているわけではない。その証拠のひとつとして、ここでの例のようにあまりにもやり慣れている行為において自分がどのように身体を動かしているのかはかならずしも簡単には言語化できないということが挙げられるだろう。

不慣れたことをたどたどしく行なっているときには、事情が異なる。たとえば、私をはじめて訪れた観光地で高所にかかった揺れる橋をゆっくりと一歩一歩慎重に渡っているとしよう。このとき私は、橋を渡っているという自分の進行中の行為を、複数のステップからなるものとして経験するかもしれない²⁹。その場合、橋を渡っているという自分の行為は、私にとって、いわば切れ目のついたものとして経験されるだろう。

進行中の行為の経験に関するこうした対比は、そうした経験における fiat のあり方の違いによって、以下のように説明される。私が着慣れたシャツのボタンをとめているときの進行中の行為の経験が切れ目のないひとつのものであるのは、その始点のみに、このシャツを着ることの決意に類比的な fiat があるからと考えられる³⁰。それとは対照的に、私が揺れる橋を渡っているときの進行中の行為が切れ目をともなって経験されるのは、その始点だけでなく、切れ目のそれぞれに fiat があるからである。

問題は、二番目のケースで行為の切れ目に位置づけられる fiat は、何を（類比的な意味で）「決意」するのかということである。ここで注意すべきは、いま問題になっている2つの事例の対比が、進行中のひとつの行為がどのように経験されるかの違いによって成り立つという点だ。つまり、二番目のケースで私が進行中の自分の行為として経験するのは、あくまでも橋を渡っているという行為であって、そうした行為の（言葉の広い意味での）部分となる身体運動ではない³¹。したがってこのときの私の行為の切れ目は、その行為がそれに沿って異なる行為へと分解されるようなものではなく、ひとつの行為がそこで（それほど長くないあいだ）中断される箇所として理解すべきものである。別の言い方をすれば、私は自分が経験する行為の切れ目ごとに、進行中だった行為を

再開させている。したがって、行為の切れ目に位置づけられる fiat のそれぞれは、この揺れる橋を渡ることの決意に類比的である。

第二の議論によって得られたことを整理し直そう。着慣れたシャツのボタンを留めているという行為がまさにそのような行為として（切れ目なく）経験されるのも、揺れる橋を慎重にゆっくりと一步一步渡っているという行為がまさにそのようなものとして（切れ目をともなって）経験されるのも、それらの行為の始点にある fiat がそれぞれ「このシャツを着る」や「この橋を渡る」と表現できる内容を持つことによって説明されるのである。そして、後者の行為が、切れ目をともなうにもかかわらず、揺れる橋を慎重にゆっくりと一步一步渡っているというひとつの行為として経験されることは、同じことを「決意」する fiat が切れ目ごとにあることによって説明される。要するに、進行中の行為の始点にある fiat は、そこで「決意」されることに応じて、当該の行為の経験に統一性を与えるという役割を持つのである。

4.3 (causing) を擁護する議論

以上の2つの議論によって (fiat) が認められるならば、ドレイファス的な批判が直接のターゲットとする (causing) についても、それを擁護するための議論を与えることができるようになる。

ある進行中の行為の経験の始点における決意の類比物、つまり fiat は、この行為の進行とともに段階的に実現されるものとして経験され、完全に実現されたものとして経験されることによって、それが決意と共有する特徴を失う（そしてこの点でも、fiat は決意と類比的である）。言い換えれば、ある行為を開始したことの経験は、その行為が完了する経験を持ったその瞬間に、それによって実現されることが（完了の時点以降の時点からみて）未来に成り立つという信念や判断の理由としての資格を失うのである³²。たとえば、私が研究室に行っているという行為が完了することを私が経験したならば、この進行中の行為の経験（を思い出すこと）は、「私は研究室につくだらう」という信念や判断の理由をもちや与えてくれない。

だが同時に、進行中の行為が完了することの経験は、新たな信念ないし判断の理由を行為者に与える。上の例を引き継ぐならば、研究室に行っているとい

う行為を完了させたとき、「私はいま研究室にいる」という信念や判断にとっての一定の理由を手にするのである。つまり、進行中の行為が完了することの経験は、それを持った行為者を、その行為の充足条件に含まれる世界の状態がすでに成り立っているというコミットメントのなかに置くのである。

こうした事情は、進行中の行為がそれによって実現されるべき世界の状態を引き起こしていることが、まさにその行為の経験のなかに登場することによって説明できる。つまり、その場合、研究室に行くという行為が完了することによって私が研究室にいるという状態が成り立たせられたことは、まさにそうした行為が進行し完了するという一連の過程の経験のなかで、私が何らかの気付きを持っているものとみなされることになる。自分はいま研究室にいるという信念や判断の理由を、研究室に行っているという行為が完了する経験を通じて私が手に入れることができるのは、進行中の行為の経験におけるこうした気付きによるのではないだろうか。

4.4 まとめ

本節のはじめのほうでも述べたことを繰り返すことになるが、ここで提出された議論はどれも最良の説明への推論というかたちをとるものであり、当然ながら決定的なものではない。進行中の行為の経験に関して私が説明すべきだとした事柄について、よりよい説明があるかもしれない。また、私が説明すべきだと思っている事柄は、もしかしたらそもそも説明されるべき事柄ではないかもしれない。しかし、以上の議論は、フッサールの見解に反対する側に反論を要求することができる程度には、この見解に一定の積極的な根拠を与えたのではないかと期待している。したがって本稿では、フッサールの見解をめぐる議論をさらに先に進めることはしない。その代わりに、結語として、これまでの議論に関する大局的な観点からの所見をいくつか述べよう。

5. 終わりに

本稿が主題としてきた進行中の行為は、いわゆる分析哲学における行為論において近年大きな関心を集めるトピックでもある。現代の行為論に多大な影響

を与え続けたデイヴィドソンの枠組みのなかでは、行為はもっぱら出来上がったものとして扱われるため、進行中の行為（あるいはプロセスとしての行為）の持つ独特さが議論されることはあまりなかった。しかし、トンプソンが論じたように、行為を進行中のものとして捉えることは、行為の理由の説明に関する優れた描像を与えることができる（cf. Thompson 2008, part 2）。デイヴィドソンの枠組みが得意とする行為文における副詞修飾をめぐる問題についても、行為を進行中のプロセスとして捉えることによってよりよく扱うことができるという議論が、スチュワードによって提出されている（cf. Steward 2012）。また、ホーンズビーは、標準的な行為論が行為者の心的状態（たとえば信念と欲求）によって行為を説明し、行為者自身の役割を締め出していることを指摘しつつ、行為を進行中のプロセスと捉えることで行為者に役割を与えることを提案している（Hornsby 2012）³³。

以上のような展開は、進行中の行為に関する現象学的な議論（以下「行為の現象学」）といわゆる分析哲学における狭義の行為論（以下「行為論」）のギャップを埋めるための手がかりを与えてくれる³⁴。上でごく簡単に紹介したホーンズビーの議論に顕著のように、プロセスとしての行為に着目することは、行為において私たち行為者が何をしているのかを明らかにすることを目指している³⁵。こうした探究に対して、行為の現象学は、経験の水準において着目すべきデータを提供するだろう。そのかぎりでは、行為の現象学には、進行中の行為に関する行為論内部の対立する理論を評価する際の尺度をより充実させる役割を担うことが期待される。反対に、行為論における進行中の行為に関する議論から、行為の現象学は多くを学ぶことができるはずだ。たとえば、本稿の第4節で扱った、進行中の行為やその開始・完了の経験が特定の信念や判断に理由を与えるという議論は、進行中の行為による行為の理由の説明というトンプソンの試みを参照することによって、より包括的に展開することが可能になるだろう。また、本稿では立ち入ることができなかったが、進行中の行為の形而上学をめぐる行為論内部の議論もまた、本稿の第1節と第4節の議論を精緻化するために役立つだろう。

このような見通しは、本稿の議論が現代哲学のなかに一角を占めうることを示唆している。しかし、本稿のどこが現代現象学なのかということについては、

少し説明が必要かもしれない。このことについて簡単に述べ、それを踏まえた提案をすることで、本稿を閉じよう。

本稿の第4節でフッサールの見解に積極的な根拠を与える際に、主に2つのやり方が議論に持ち込まれた。ひとつは、ある経験が別の経験にどのような理由を与えるかに着目し、前者のどのような特徴がそうした理由の関係を成り立たせるのかを論じるというものである。この方法は、(fiat)を擁護する第一の議論と(causing)を擁護するための議論で用いられた。そしてふたつめは、ある経験を別の経験と対比し、そうした対比が両者のどのような特徴から成り立つのかを論じるというものである。この方法は、(fiat)を擁護する第二の議論で用いられた³⁶。

これらの方法のどこが現象学的なのか、といぶかしがる人がいるかもしれない³⁷。こうした疑念に対する一番簡単な応答は、これらの方法を古典的現象学の伝統と関連づけるというものだろう。すでに述べたように、これらの方法が用いられた議論のいくつかは、フッサールに着想を得たものだった。また、ミュンヘン現象学派の代表的な人物であるプフェンダーは次のように述べている。

当然のことながら、心情の現象学的研究は、現象学一般と同じく、事象の単なる「観取」によって片がつけられるものではない。そうした研究は、他のあらゆる学問的研究と同じく、比較と区別、分析、関係づけといったものを含む。(Pfänder 1913, 330)³⁸

現象学者が事象そのものへと向かうことは、ただそれを「観て取る」ことによって尽くされるわけではない。経験同士の関係を明らかにし、その関係の根底にあるものを析出することもまた、事象そのものに向かうことの一部なのである。本稿で用いられた方法は、ここでプフェンダーが述べている方針を継承し、発展させたものとして位置づけることもできる。

こうした応答に不満が残ってもおかしくない。というのも、経験の対比という方法は、たとえそれが現象学の伝統に属するものであろうとも、現象学の伝統に固有のものであるようには思われなからだ。本稿で論じたことの範囲でこの不満を晴らすことは難しい。本稿が問題にしてきたのは、進行中の行為の

経験そのもののあり方だった。ここで問題にしているような意味での経験は、現象学だけが扱う事柄ではもちろんない³⁹。だが、経験が一人称的なしかたで私たちに気づかれているものである以上、経験を捉えようとする試みが、たとえ現象学の伝統における同様の試みを自覚的に継承するものでないとしてもそれにいくらか似てくることには、何の不思議もない。そのため、経験そのものが主題になっている限りでは、現象学の伝統に根ざした現代現象学のアプローチは、他のアプローチとの違いをそれほど劇的には示さないのである⁴⁰。

現代現象学の特徴は、論じられるトピックを、徹底的に経験に紐づけることにある。したがって、現代現象学の議論の（賛否両論のある）個性がより際立つのは、経験そのもののあり方が話題になっている場面ではなく、かならずしも経験と関係づけて論じられるわけではない事柄が主題になっている場面だろう⁴¹。この点については、また別の機会に論じたい⁴²。

さて、すでに何度も述べたように、本稿で私が擁護した見解やそれを擁護する議論のいくつかはフッサールに着想を得たものだが、本稿はフッサールの立場の再構成を目指したものではなかった。とはいえ、本稿で擁護したフッサールの見解のうち、(RA-P) と (fiat) をフッサール自身に帰属させることは、おそらく可能である。また (causing) についても、必要に応じて（重大な）変更を加えれば、それをフッサール自身の主張とみなすことも不可能ではない⁴³。つまり、本稿のような話は、現代現象学の論文ではなく、「フッサールの現代的意義」を示す論文として書くこともできたのである⁴⁴。しかし、少なくとも私自身は、そのようなかたちで論文を書く必要をもちや感じていない。その理由は主に2つある。

第一に、フッサールの見解を実際にフッサールの見解として示すためには、文献上の根拠を与えるための手続きがかなり煩雑になるからである⁴⁵。煩雑であることそれ自体が悪いと言いたいわけではない。問題は、そのように煩雑な手続きは、フッサール読みとしての技巧を顕示する以外の役割をあまり持たないように思われるということである。もし現代の議論と接続できる見解を現象学の伝統に根ざした仕方では提出することが目的ならば、本稿のようなやり方をすれば十分ではないだろうか。

第二に、フッサール自身による行為の現象学がどのようなものかを明らかに

することが目的ならば、現代の議論との接続に重点を置く必要は少なくとも当面ないからである。この話題に関連するフッサールの議論の大半は研究草稿に残されており、2018年11月現在、それらの草稿には、フッサール文庫で閲覧する以外には接近する手段すらない。そのため、フッサールの行為の現象学の全貌はまだ明らかになっていないと言え難い。それに加え、行為というトピックは、フッサールにとって単なる個別事例のひとつではなく、超越論的現象学のプロジェクト全体に関わる可能性がある⁴⁶。そのため、フッサールの行為の現象学に関する研究には、フッサールのシステム全体のなかにそれをうまく位置づけるという課題が、ほとんど手つかずのまま残されている。こうした作業は、現時点ではそれが私たちにとって持つかもしれない哲学的意義を論じるよりもずっと前の段階にある。そのため、現代の議論との接続という作業をしなくても、この領域でポイントのある研究をするための余地はたくさん残されている。ならば、フッサール研究としてまずやるべきは、そうした仕事ではないだろうか。少なくともフッサール研究者としての私は、こちらの路線の研究により大きな意義を感じている。

現代現象学という研究のフォーマットは、いま述べたような状況にあって、現代における生きた哲学としての現象学と、哲学史研究の対象としての——もう思い切ってはっきりと書いてしまうが、少なくとも一度死んだ——古典的現象学をうまく切り離すための提案でもある⁴⁷。フッサールのアイディアを現代の議論の上に載せるときに、それがフッサール研究としても成り立つことを無理して示す必要はもうない。同じことは、フッサールとはさまざまな点で対立する他の古典的な現象学者についても成り立つはずだ。そのため、言うまでもないことだが、フッサールの観点に立った本稿の私のやり方や、『ワードマップ現代現象学』での（やはり総じてフッサール色の強い、と言わざるを得ない）やり方だけが現代現象学であるわけではない。行為に話題を限ったとしても、現代現象学はその内部に対立や緊張関係を含んだアプローチでありうる。このことは、本号に掲載された池田喬の論考を読むだけでも明らかになるだろう⁴⁸。

註

1. こうした指摘として、たとえばサルルによるものが挙げられる (cf. Searle 1983, 90) . こうした相違は、行為者性の感覚 (the sense of agency) と所有の感覚 (the sense of ownership) に関する議論においても扱われている。この議論については Gallagher & Zahavi 2012, ch. 8 を参照のこと。
2. 同書の目次を見ると「行為」という語はそれなりに登場していることがわかる。また、吉川孝が執筆を担当した「6.2 道徳」では、道徳的な行為の動機づけに関する問題を道徳経験の現象学分析を通じて扱う方向性が示されている (cf. 植村ほか 2017, 189–194) . そのため、同書は行為をまったく扱っていないわけではない。しかし、本稿のような議論は同書のなかにはほぼないというのが私の実感であり、このことは私以外の (編) 著者や読者にも共有されているのではないかと思う。
3. 念のために記しておけば、2018年11月現在、『ワードマップ現代現象学・中級編』的な書籍を作ろうという計画はないし、酒席での冗談を除けば、おそらく誰もそれを提案していないはずである。ちなみに、思わせぶりなことをしたくて書くわけではまったくないのだが、『ワードマップ現代現象学』に結実するアイデアが高知の川沿いの某所で最初に話し合われたとき、その場にいた人たちの手にはアルコール飲料があった。
4. 進行中の行為は、近年の行為論において注目を集めるトピックでもある。この点については第5節で触れる。
5. 「I'm going to my office」という対応する英語の表現と比べると、「私は研究室に行っている」という日本語の進行相の表現は、やや不自然に響くかもしれない。しかしこの言い回しは、少なくとも次のような表現の一部としては自然ではないだろうか。「研究室に行っているあいだに私は同僚3人とすれ違った」。しかしいずれにせよ重要なのは、進行相の動詞を用いた表現やその自然さではなく、それによって表現される行為そのもののあり方である。
6. このことは、出来上がったものとしての行為に関しては現象学的な考察をする必要がないことを意味するわけではない。実際、フッサールの行為の現象学は、私たちがしていることとしての行為と、私たちの評価の対象としての行為の関係を明らかにしようとしていたように思われる (cf. Uemura 2015, 123–124; 植村 2015b, 133–134) . しかし本稿では話題を進行中の行為とその一人称的な観点からの経験に限定する。
7. 『フッサール全集 (Husserliana) 』第XLIII/3巻に収められる予定の研究草稿で、フッサールは以下のように述べている。「行うこと、行為することは、現出的な (phansisch) 時間を貫いて不断に延びる意志志向であり、ここでの志向という言い方は、意志することの根源的に現象学的な特性——これを意志的な形式ということもできる——に関わる。どんな行為についても、意志の形式 [...] から意志の質料つまり生み出される客観的な過程や出来事を区別するのは一般的にいつて好ましいことだろう」(Ms. A VI 12 II, 199a [wohl 1909/10]) . ここでの「質料 (Materie) 」という言い方は、まず間違いなく『論理学研究』で導入された用語「作用質料 (Aktmaterie) 」を踏襲したものであり、いわゆる表象内容のことを意味する。そのため、質料と対置される「形式 (Form) 」は、『論理学研究』では「作用性質 (Aktqualität) 」と呼ばれたもののことであると解釈できる。すると、フッサールはここで、行為すること (進行中の行為の経験) の分析に『論理学研究』の志向性理論の枠組みを適用していることになる。
 とはいえ、細かいことをひとつだけ指摘すると、質料を客観的な過程や出来事と言い換えるとき、フッサールは『論理学研究』の枠組みを超えてもいる。このことは、この草稿が書かれたと推定される時期のフッサールが、自らの志向性理論において表

象内容の役割を果たすものを、志向的な体験に例化される質料ではなく、そうした体験の志向的对象に求めようとする試みを繰り返したことに由来するといっていだらう（この試みが一段落した後の『イデー I』のフッサールは、志向的对象としての内容を「（作用）質料」ではなく「ノエマ的意味（noematischer Sinn）」と呼ぶのだが、この草稿の頃にはまだ用語法が定まっていなかったのだろう）。『論理学研究』における作用質料と作用性質の区別、そしてこの区別が志向的对象としての意味（＝内容）とどう関係するのかについては、植村（2017a, 152-154）である程度詳しく論じた。また、フッサールの意志の現象学・行為論については、Melle 1997; 八重樫 2008; 植村 2015b; Uemura 2015, 123-125 を参照のこと。

8. 私の念頭にあるのは、「現象学の主要テーマとしての志向性」と題された『イデー I』第 84 節でフッサールが意識の志向性について例をあげながら語るときの、「行為することは行為に、行うことは行いに向かっている（Handeln geht auf Handlung, Tun auf Tat）」(III/1, 188) という一節である。ここでのフッサールの主張については植村 2015b でも論じた。
9. 「表象的志向性」という言い回しは冗語的に響くかもしれないが、現象学の伝統では、非表象的な志向性というものに余地が与えられるようなかたちで志向性が捉えられることがある。たとえば門脇 2003 や Drummond 2013 は、それぞれ志向性を非表象的に捉えようとしている。Dreyfus 1993 も、ハイデガーやメルロ＝ポンティが論じた志向性は表象的志向性の基礎となる非表象的な志向性だと主張する。
また、近年の心の哲学でも、たとえば何かを愛することのような、非命題的態度（non-propositional attitudes）への着目によって、内容を持つことと同一視できないような志向性が議論の俎上にのぼりつつある（cf. Grzankowski 2013）。ただし、こうした非命題的な志向性を、現象学の伝統において論じられてきた非表象的な志向性の一種とみなすことは難しい。というのも、ここでは、非命題的態度の志向性を非命題的な表象によって説明する立場がオプションとして残されているからである（cf. Grzankowski 2013, 1131）。
10. そうすると問題になるのは、経験が何かについてのものであることと、その経験が内容を持つことのうち、どちらがどちらを説明するのかということだろう。しかし、本稿ではこの（いうまでもなく重要な）問題には立ち入らない。
11. ここでは話を簡単にするために経験の充足条件を真理条件（に準ずるもの）によって与えているが、これは現象学的な志向性理論にとって唯一の選択肢ではない。この点については、富山の執筆による、『ワードマップ現代現象学』「4-1 志向性と真理」を参照のこと（cf. 植村ほか 2017, 98-114）。
12. したがって、進行中の行為は、充足条件の一部をなす行為者や世界の状態（本文の例では、私が研究室にいること）に、行為者によって実現されるべきものとして向かっていると述べることができる。先の注 8 で引用したフッサールの『イデー I』の一節は、こうした事情を述べたものと解釈できる。
13. 「因果的な自己言及（causal self-referentiality）」という用語はサルトルによるものである（cf. Searle 1983, 85）。本稿の第 2 節では、この点も含め、サルトルの立場がフッサールの見解と似ていることをごく簡単に確認する。なおここで注意しておけば、フッサール自身は進行中の行為が何かを生み出すことを自然の因果性から区別しようとした（cf. Ms. A VI 7, 51a-54a [wohl um 1910]）。フッサール解釈を標榜しない本稿ではこの主張を継承しないが、フッサールの行為論を再構成する場合には、この問題に取り組むことは欠かせないだろう。

14. もちろん私は研究室に行っているという進行中の行為に再び携わることができるが、それは、すでに消失したトークンとは数的に異なるがそれとタイプ同一的な行為を開始することによってのみ可能である（そしてそのためには、私は一度研究室から離れなければならない）。また、私が研究室にいるときにも「私は研究室に行っている」と適切に述べることはたしかにできるのだが（たとえば、携帯に電話がかかってくる「いま自分の家にいるか」と聞かれたとき）、ここでの「行っている」は進行相ではなく継続相の動詞として理解されるべきだろう。つまりこの言語的データは、研究室に行っているという進行中の行為が私が研究室にいるときにも存在するという存在を保証するものではない。
15. フッサールの公刊著作のなかでは、『イデーニ I』の第 122 節 (Hua III/1, 281) でこのことがごく簡単に触れられているのだが、これを適切にパラフレーズするためには関連する講義や草稿をいろいろ参照することが必要になるだろう。これらの講義と草稿における *fiat* に関する議論については、Uemura (2015, 126–127) を参照のこと。なお、「*fiat*」という用語はフッサールがジェームズの『心理学原理 (*The Principle of Psychology*)』から借用したものである (cf. Melle 1997, 176–177)。また、プフェンダーの「意志衝撃 (*Willensimpuls*)」(Pfünder 1911, 126) やヒルデブランドの「開始 (*Inangriffnahme*)」(Hildebrand 1916, 161) も同様のものを指していると解釈できる。プフェンダーの意志の現象学については Uemura & Yaegashi 2012 および Uemura forthcoming を、初期現象学における行為論全般については Salice 2018 を参照。
16. 何かが何かを引き起こすという単称的な因果関係がそもそも経験のなかに登場する（あるいは登場しうる）のかということ、控えめにいって論争の余地が大きく残されている事柄である。しかし、(causing) が成り立つために最低限必要なものとして限定的に理解するならば、因果関係が経験されうるとする主張はそこまで大胆なものではない（と思う）。(causing) は、自分の行為ではない出来事同士のあいだに成り立つ（とされる）因果関係、たとえばある球の運動がそれとぶつかった球の運動を引き起こすことは経験されるのかという問題に関して中立的であることができる。というのも、(causing) によって経験のなかに登場するとされる因果関係の一方の項である進行中の行為とは、当該の経験を持つ主体がまさに行なっている行為のことだからだ。別の言い方をすれば、ここで問題とされる因果関係の経験は、私が（自分の行為を通じて）世界内に何かを引き起こしていることの経験のことではない。こうした経験を私たちが現に持つことは、そこから行為と因果に関する何らかの形而上学的主張を請求に引き出さないかぎり、広く認められるのではないだろうか。この点については、たとえば Horgan (2007) も参照のこと。なお、初期現象学の伝統にも、経験の主体としての私（「自我 (*das Ich*)」）が何かを引き起こすことの経験や、経験の対象が私に何かを引き起こすことの経験に関する議論がある (cf. Uemura forthcoming)。
17. この方針をドレイファス自身がはっきりと明かす箇所をひとつ引いておこう。「70 年代にパークレーで教えていたとき、志向性に関するジョン・サールの説明がフッサールの現象学の分派によって与えられた説明と似ているさまに印象づけられた。その結果、私はすぐに、私がサール扮するフッサールとみなしたものに対して、ハイデガーの役割を演じるようになった」(Dreyfus 1999, 3)。
18. ドレイファスは当初、自身がハイデガー的立場から批判するサールの行為論に対応する見解はフッサールにはないと考えていたが (cf. Dreyfus 1991, 55)、その後、行為に関しても両者の見解に類似性が見られると主張するようになる (cf. Dreyfus 2000, 288)。ただし、そこでドレイファスはマリガンのフッサール解釈 (Mulligan 1995, 232n54) を

典拠とするだけで、フッサー自身テキストの引用と分析を行なっているわけではない。同様の指摘に際してテキスト上の根拠をきちんと挙げたものとして、たとえば八重樫 2008 を参照。

19. ここでは四点だけごく簡単に指摘しておこう。最も重要なのは、(i) フッサーが一貫して意志 (Wille) を問題にしているのに対して、サールが論じるのが意図 (intention) であるという違いだろう。フッサーによれば、進行中の行為 (「行為すること」) は「行為意志 (Handlungswille)」ないし「実行意志 (ausführender Wille)」と特徴づけられるものでもある。この点については Uemura (2015, 125–126) および植村 (2015b, 134–135) を参照のこと。(ii) サールによれば、進行中の行為における表象的志向性の担い手は行為内の意図 (intention in action) であり、行為内の意図は身体運動とともに行為を形成するとされる。それに対して (RA) は、進行中の行為が表象的志向性を持つ以上のことを何も述べていないため、進行中の行為と身体運動の関係に関するサールの見解と両立しうるが、それだけを支持するわけではない。(iii) 進行中の行為の経験に関する分析とみなされたサールの立場は (fiat) と両立しうるが、私の知る限り、サールは (fiat) やそれに類する見解を認めているわけではない。(iv) サールが進行中の行為に認める因果的な自己言及性も、(causing) に登場するそれとは異なる。サールの場合、進行中の行為に含まれる行為内の意図は、その意図によって実現されるべき身体運動を因果的に引き起こすとされる。これに対して (causing) が述べているのは、進行中の行為が、それによって実現されるべき世界内の状態を引き起こすということである。この最後の相違については、この節の続く箇所でも取り上げる。
20. 行為者性の現象学という観点からサールの立場を再構成して論じたものとして、Bayne 2008, 188–189 も参照のこと。
21. 註 19 を参照のこと。
22. また、(c) の最初の連言肢を (d') にあわせたものに書き換え、フッサーの見解に対する反論としてより確かなものとすることもできるだろう。しかしここでは (c) をそのままフッサーの見解への反論として扱う。
23. なお、(fiat) に似た見解は、クリーゲルによって本稿のそれとは異なる議論によって擁護されている (cf. Kriegel 2015, 88–91)。本稿でクリーゲルの議論に立ち入ることはできないが、そこでクリーゲルが依拠するリクールの意志の現象学が初期の現象学者、とりわけプフェンダーに多くを負っていることは、ここで指摘するに値する (なお、クリーゲル自身はこのことに触れていない)。
24. この「一定の」理由がより詳しくはどのようなものであるかということは、本稿では論じることができない。しかし、二点だけ注意事項を述べておこう。
 第一に、決意の経験が未来に関する信念に与える理由は、その他の要因によって比較的容易に阻却可能なものに過ぎない。明日の昼は近所のカレー屋に行こうと決意する私の経験は、明日の昼には私はカレー屋にいらるだろうと私が信じることに理由を与えるが、この理由は、たとえば、明日はカレー屋の定休日だと思出すことによって阻却されるだろう。しかしここで注意すべきは、いま問題にしている理由は、私が経験を通じて手に入れ、経験を通じて阻却されるものでしかないということである。したがって、明日がカレー屋の定休日であるにも関わらずそのことを私が思い出していない段階では、私の決意は、当該の信念の理由であり続ける。つまり、ここで問題にしている理由は、内在的理由と外在的理由の区別を導入するならば、前者に分類されることになるだろう。

第二に、「決意の経験が未来の信念に理由を与える」という言い回しは、決意の経験そのものが信念の理由であるという見解を含意するわけではない。以下での議論は、(i) 理由を経験のような心的なもののみならず立場だけでなく、(ii) 理由を世界内の事実とみなす立場とも両立する、というも、「決意の経験は、未来の事実をその対象として持つことによって、未来の信念に理由を与える」と主張することもできるからだ（ただしその場合には、決意が与える理由の阻却可能性をどう考えるのかという問題が生じるだろう）。また、「決意の経験は、その時点ではまだ成り立っていない事態を対象として持つことによって、未来の信念に理由を与える」と主張することで、本稿の議論は、(iii) 理由を（心的なものや事実のように）成立している必要のないものとみなす立場と両立させることができるだろう。本稿では、この三つのオプションのどれに対しても中立的なままである。なお、理由の存在論的身分をめぐるこうした問題は、行為論とメタ倫理と認識論を横断して近年さかんに論じられているトピックであるが、初期現象学の伝統のなかで議論が重ねられたトピックでもあった（ただしそこでは、理由は多くの場合「動機 (Motiv)」と呼ばれていたことに注意が必要である）。近年の議論については Wiland 2013 および鈴木 2014 を、初期現象学における議論に関しては Uemura & Salice 2019 を参照のこと。

- これは、フッサールが 1914 年の倫理学講義ではっきりと指摘していることでもある。「意識が語るのは、たしかに『しかじかのことが未来に成り立つから、私はそれを意志する』ではなく、むしろ『私がそれを意志するから、しかじかのことが未来に成り立つ』である」（Hua XXVIII, 107）。
26. ここで「一定の理由」とは何かということについても本稿では立ち入ることができないが、一点だけ指摘しておこう。進行中の行為が未来に関する信念に与える理由は、それに対応する決意が同じ信念に与える理由とまったく同じではないだろう。というも、後者の理由は、たとえば自分が怠け者で決意したことをなかなか実行しないという信念によって簡単に阻却されるのに対して、前者の理由は、後者と完全に同様の仕方で阻却されるわけではないように思われるからだ（自分のことを怠け者だと思っているのだとしても、私がいま研究室に行っていることは、当該の信念により強い理由を与えるはずである）。こうした相違は、本文でこのあと論じる進行中の行為の開始と決意の類比を成り立たせなくするものではない。進行中の行為を始めることは、決意ほどではないが、それでもやはり比較的容易に阻却可能なものであることには変わらない。たとえば、私が今日の昼食のために近所のカレー屋に行っているという行為を始めたことによって、私は、私は（ごく近い未来に）そのカレー屋にいるだろうという信念についての一定の理由を手に入れるが、この理由もまた、今日はカレー屋の定休日だと思出すことによって阻却されるだろう。したがって、両者のあいだには、未来に関する信念の（容易に阻却可能な）理由になるという共通点が残されている。この共通点の特異さは、両者を類比的に捉えることの良い根拠となるはずである。以上の論点について、小川祐輔氏から有益な質問をいただいた。記して感謝する。
27. したがって、ある行為を始めたことが当該の信念ないし判断の理由にならないときには、その行為は中断されたのではなく、もはや放棄されたとみなされるべきだろう。すると、たとえば、私はこの論文を完成させるだろうという信念に対して、私がこの論文を書き始めたことが一定の理由にさえならない場合、私はその論文を書いているという進行中の行為を中断しているのではなく、すでに放棄しているということになる。
28. この議論は、『フッサール全集』第 XLIII/3 巻に集録されるはずのフッサールのある草

- 稿での議論 (Ms. A VI 12, 216b–217a [wohl 1909/1910]) を (かなりラディカルに) 再構成したものである。なお、シャツのボタンを留めるという例は私自身が考えたものだが、揺れる橋の例はこの草稿でのフッサールの議論に登場するものである。
29. 揺れる橋をゆっくりと慎重に渡っているときに私たちはいつもこのような経験を持つ、と言いたいわけではない。場合によっては、このとき私が持つ経験は、橋を渡っているというひとつの行為の経験ではなく、体をこわばらせながら足を一步前に踏み出すという行為を繰り返す経験にすぎないかもしれない。あくまでも以下の議論は、揺れる橋をゆっくりと慎重に渡っているときに私たちが持ちうる経験のひとつのあり方に着目したものであることに注意してほしい。
 30. 繰り返し述べておくが、揺れる橋をゆっくり慎重に一步一步渡るときにいつでも私たちはこうした経験を持つと言いたいわけではない (ひとつ前の註を参照)。また、私の主張は、目下のケースで私の身体運動は自分の行為として経験されないというものであって、このとき私の身体運動はまったく経験されないというものではない。さらにいえば、私がここで問題にしているのは、私がこのとき自分の行為として経験するものは何かであって、私がこのとき何をしているかではない。したがって、私の主張は、当該のケースで私が足を一步前に踏み出すという行為もしているという見解とも両立する。
 31. ここで私は、進行中の熟達したなめらかな行為はどれも切れ目のないものとして経験されると主張したいわけではない。たとえば、1階の入り口から4階の研究室に向かっているという行為は、途中の踊り場で同僚に声をかけられて立ち止まることで中断されたならば、切れ目を持ったひとつの複雑なものとして経験されるかもしれない (その場合、経験の切れ目は、進行中だった行為の再開始点に *fiat* があることによって説明されるだろう)。
 32. そのときにも、この経験 (を想起すること) は、問題の行為が完了する前の時点で行為者が未来に関する当該の信念を持っていたことと理由を与えるだろう。
 33. 進行中の行為を重視するこれらの論者のあいだには、もちろん見解の相違や対立もある。ここで特に争点となるのは、進行中の行為はどのような身分の存在者なのかという形而上学的な問題である。この点を含め、本段落で述べたことに関する見通しを与えてくれるものとして、行為論と心の哲学におけるプロセスというカテゴリーの復権に関する論集である Stout 2018 の序論を参照のこと。
 34. いわゆる分析哲学の内部で、心の哲学の一分野として論じられている行為者性の現象学 (*phenomenology of agency*) と行為論がほとんど没交渉であることを踏まえると、ここで述べる見通しは——それをうまく実現することができるならば——大きな意義を持つように思われる。行為者性の現象学については、Bayne 2008 を参照。
 35. この点に関して、先の中で言及した論集の序論でのスタウトの次の発言が示唆的である。「何かが起こること (*some occurrence*) を進行中のものとして記述することで、その起こることが未来と現在と過去のどこにあるものであるであろうとも、私たちはその起こることが生じているその内側からの (*from within*) パースペクティブを占めるのである」(Stout 2018, 1)。
 36. 『ワードマップ現代現象学』でも、こうした方法は関係的な観点からの経験の分析として取り上げられた。八重樫の執筆による第2章「経験の分類」を参照 (cf. 植村ほか 2017, 36–42)。
 37. この方法は、知覚の哲学において、知覚の許容可能な内容に関する議論で用いられる現象的対比 (*phenomenal contrast*) とおおよそ同じものだと言っていいだろう。したがっ

て、本稿での関連する議論は、この先、現象的対比に突きつけられるのと同じ困難に対処する必要にせまられるだろう。こうした問題については、今後の課題としたい。

現象的対比とその問題点については、源河 2017, 96–102 を参照のこと

38. ここでプフェンダーが言及している心情 (Gesinnungen) の現象学については、Uemura & Yaegashi (forthcoming) を参照のこと。
39. そもそも、『ワードマップ現代現象学』での「経験 (experience)」の用法は、現象学の伝統の外でのこの語の使われ方を踏まえて導入されたものだった。吉川の執筆による第 1 章「現代現象学とは何か」の末尾を参照 (cf. 植村ほか 2017, 32)。
40. とはいえ、こうした場面でも現代現象学的なアプローチはまったく没個性的だというわけではないだろう。(fiat) を擁護する第二の議論に登場した、自分の行為が切れ目なくひとつのものとして経験されることと、自分の行為が統一性を持ちながらも切れ目をともなって経験されることの対比は、両者の違いを「切れ目」という表現を使って記述することも含め、現象学の伝統における議論の蓄積 (ここではフッサールの研究草稿) に助けを得ることによって哲学的な議論の俎上に乗せることができるようになったものである。このようにさまざまな経験の違いのなかに分け入っていく作業に関して、現象学の伝統には一日の長があり、経験そのもののあり方が問題になっている場面で興味深い問題提起や提案をすることが期待されるだろう。そしてこれに関連して注意しておきたいのは、現象学的な考察は、特定の経験の一般的で普遍的な構造の解明を目指す本稿のような路線だけでなく、個々の経験の特殊性や個性性に着目するという方向にも展開可能であるし、そうした展開が求められているということである。この点に関しては、森功次が執筆した『ワードマップ現代現象学』第 7 章の末尾を参照のこと (cf. 植村ほか 2017, 221–223)。
41. 『ワードマップ現代現象学』では、私が執筆した第 5 章「存在」での議論が、こうした場面を扱ったものだといえるだろう (cf. 植村ほか 2017, 138–166)。
42. この話題については、植村 2019 の第 2 節、とりわけ 126–128 頁も参照のこと。
43. 上の註 13 でも触れたように、フッサールの草稿には、進行中の行為が世界内の状態を成り立たせることを因果から区別しようとしていた痕跡がある。このことを踏まえるならば、(causing) に登場する因果関係を何らかの非因果的な関係に置き換えることが必要になるだろう。
44. このような「哲学史への哲学的アプローチ」については、植村 2017b でも批判的な観点から論じた。
45. この路線で議論をするためには、たとえば本稿の註 7 にあるようなことをもっと細かく延々と書く必要が出てくるだろう。こうした煩雑さの一端は、植村 2017a を開くことで垣間見ることができるかもしれない。
46. この点については、Uemura 2015, 植村 2015a, 植村 2016 を参照のこと。
47. 本文のひとつ前の段落を読めば明らかだと思うが念のため注意しておけば、現代現象学と古典的現象学の研究を切り離すこうした提案は、後者の価値を貶めようとするものではない。
48. 本稿は、2018 年 7 月 21 日に筆者が行なった、若手哲学研究者フォーラムでのレクチャーに基づくものである (レクチャーの題目は「志向的経験としての行為——意志の現象学の観点から」だったのだが、副題があまり実情に即していないため、本稿ではそれを改めた)。共同でレクチャーを務めた池田喬氏、企画と当日の司会を担当した原健一氏、そして疑問や反論などを寄せてくださったオーディエンスの各位に感謝する。また、本稿のドラフトに対して、以下の方々からコメントをいただいた。記して

感謝する。井頭昌彦，小川祐輔，小草泰，佐藤大介，鈴木雄大，竹島あゆみ，田中雄祐，袴田玲，村井忠康，森功次，八重樫徹，吉川孝。本研究は，JSPS 科研費による助成をうけて筆者が行なったものである（課題番号：18K12186）。

文献表

- Bayne, T. 2008. "Phenomenology of Agency." *Philosophy Compass* 3/1, 182–202.
- Beyer, C. 1997. "HusSearle's Representationalism and the 'Hypothesis of the Background'". *Synthese* 112 (3), 323–352.
- Dreyfus, H. L. 1982. "Introduction." In his (ed.), *Husserl, Intentionality and Cognitive Science*, MIT Press.
- Dreyfus, H. L. 1991. *Being-in-the-World*. The MIT Press.
- Dreyfus, H. L. 1993. "Heidegger's Critique of the Husserl/Searle Account of Intentionality." *Social Research* 60/1, 17–38.
- Dreyfus, H. L. 1999. "The Primacy of Phenomenology over Logical Analysis." *Philosophical Topics* 27/2, 3–24.
- Dreyfus, H. L. 2000. "A Merleau-Pontyan Critique of Husserl's and Searle's Representationalist Accounts of Action." *Proceedings of the Aristotelian Society, New Series*, 100, 287–302.
- Dreyfus, H. L. 2001. "Phenomenological Description versus Rational Reconstruction." *Revue internationale de philosophie*, 216, 191–196.
- Drummond, J. D. 2013. "Intentionality without Representationalism." In D. Zahavi (ed.), *The Oxford Handbook of Contemporary Phenomenology*, Oxford University Press.
- Grzankowski, A. 2013. "Non-Propositional Attitudes." *Philosophy Compass* 8/12, 1123–1137.
- Hildebrand, D. v. 1916. "Die Idee der sittlichen Handlung." In E. Husserl (ed.), *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung*, vol. III, Halle, Niemeyer.
- Horgan, T. 2007. "Mental Causation and the Agent-Exclusion Problem." *Erkenntnis* 67, 183–200.

- Hornsby 2012. “Actions and Activity.” *Philosophical Perspectives* 26, 233–245.
- Husserl, E. 1950ff. *Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Werke*.
- Nijhoff/Kluwer/Springer. (Hua と略記しローマ数字で巻数を示す.)
- Kriegel, U. 2015. *Varieties of Consciousness*, Oxford University Press.
- Melle, U. 1997. “Husserl’s Phenomenology of Willing.” In J.G. Hart & L. Embree (eds.), *Phenomenology of Values and Valuing*, Kluwer.
- Mohanty, J. N. 1977. “Husserl’s Theory of Meaning.” In F. Elston & P. McCormick (eds.), *Husserl: Expositions and Appraisals*, Notre Dame University Press.
- Mulligan, K. 1995. “Perception.” In D. W. Smith & B. Smith, *The Cambridge Companion to Husserl*, Cambridge University Press.
- Pfänder, A. 1911. “Motive und Motivation.” Reprinted in his *Phänomenologie des Willens/Motive und Motivation*, J. A. Barth, 1963.
- Pfänder, A. 1913. “Zur Psychologie der Gesinnungen (I).” In E. Husserl (ed.), *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung*, vol. I, Halle, Niemeyer.
- Salice, A. 2018. “Practical Intentionality. From Brentano to the Phenomenology of the Munich and Göttingen Circles.” In D. Zahavi (ed.), *The Oxford Handbook of the History of Phenomenology*, Oxford University Press.
- Searle, J. R. 1979. “What is an Intentional State?” *Mind* 88/349, 74–92.
- Searle, J. R. 1983. *Intentionality*, Cambridge University Press.
- Searle, J. R. 2001. “Neither Phenomenological Description nor Rational Reconstruction: Reply to Dreyfus.” *Revue internationale de philosophie* 2001/2 (n° 216), 277–297.
- Steward, H. 2012. “Actions as Processes.” *Philosophical Perspectives* 26, 373–388.
- Stout, R. (ed.) 2018. *Process, Action, and Experience*, Oxford University Press.
- Thompson, M. 2008. *Life and Action. Elementary Structures of Practice and Practical Thought*. Harvard University Press, 2008.
- Uemura, G. 2015. “Husserl’s Conception of Cognition as an Action. An Inquiry into its Prehistory.” In M. Ubiali & M. Wehrle (eds.), *Feeling and Value, Willing and Action*, Springer.

- Uemura, G. forthcoming. “Alexander Pfänder on the Phenomenology of Motivation.”
In C. Erhard & T. Keiling (eds.), *Routledge Handbook of Phenomenology of Agency*, Routledge.
- Uemura, G. & Salice, A. 2019. “Motives in Experience. Pfänder, Geiger, and Stein.” In
A. Cimino & C. Leijenhorst (eds.), *Phenomenology and Experience. New Perspectives*. Brill.
- Uemura, G. & Yaegashi, T. 2012. “Alexander Pfänder on the Intentionality of Willing.”
In A. Salice (ed.), *Intentionality*, Philosophia Verlag.
- Uemura, G. & Yaegashi, T. forthcoming. “Alexander Pfänder.” In T. Szanto & H.
Landweer (eds.), *Routledge Handbook of Phenomenology of Emotions*,
Routledge.
- Wiland, E. *Reasons*, Bloomsbury.
- Zahavi, D. 2013. “Mindedness, Mindlessness, and First-Person Authority.” In J. K.
Scheer (ed.), *Mind, Reason, and Being-in-the-World*, Routledge.
- 植村玄輝 2015a. 「フッサールの反心理主義批判」, 『哲學』(日本哲学会編),
第 66 号, 127–142 頁.
- 植村玄輝 2015b. 「行為と行為すること——フッサールとともに現象学を拡張
する可能性について」『情況』第四期 2015 年 8 月号, 127–139 頁.
- 植村玄輝 2016. 「『作品 (Werk)』としての真理——1920 年代のフッサールと
認識の現象学の行為論化」, 日本哲学会林基金若手研究者研究助成成果報
告論文
(<http://philosophy-japan.org/wpdata/wp-content/uploads/2017/02/f2f8b0ef2633c5f2fef1d3ea626474b1.pdf>).
- 植村玄輝 2017a. 『真理・存在・意識——フッサール『論理学研究』を読む』,
知泉書館.
- 植村玄輝 2017b. 「哲学史研究は哲学的かつ歴史的でありえるのか——過去の
主張についての規範的探求という観点からの提案」, 『哲學』(日本哲学会
編), 第 68 号, 28–44 頁.
- 植村玄輝 2019. 「現代現象学は何をする (べきな) のか——荒畑・戸田山・鈴
木への応答」, 『フッサール研究』第 16 号, 105–134 頁.

- 植村玄輝・八重樫徹・吉川孝・富山豊・森功次 2017. 『ワードマップ現代現象学——経験からはじめる哲学入門』, 新曜社.
- 門脇俊介 2003. 『理由の空間の現象学——表象的志向性批判』, 創文社.
- 鈴木雄大 2014. 「行為の理由に関する心理主義, 反心理主義, 選言説——知覚の哲学を参照して——」『哲学・科学史論叢』第16号, 209–222頁.
- 源河亨 2017. 『知覚と判断の境界線——「知覚の哲学」基本と応用』, 慶應義塾大学出版会.
- 八重樫徹 2008. 「フッサールにおける行為と意志」, 『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集』第26号, 246–259頁.